

木山捷平と「長春五馬路」評

黎 愛 寧

鈴木 敏雄 (訳)

サマリー：作者木山は中国では知る人は少ないが、日本では逆にその作品は森鷗外、夏目漱石ら文豪の作品と軌を一にし、日本の著名な出版社である筑摩書房の『日本文学全集』に収められている。「長春五馬路」という作品は三十数年前に出版され、文壇ではそれほど影響のあった作品ではないけれども、その他の東亜圏の生活を反映した作品がにわかに脚光を浴びたのと同様、それ相応の独特の魅力は持っている。

キーワード：木山捷平、二戦后（第二次世界大戦後）、長春五馬路

1945年8月15日、日本の侵略者たちが無条件降伏すると、ソ連の赤軍が中国東北部に進入するが、やがて撤退する。偽都長春は東の間の光明が見られるが、すぐにまた国民党軍と共産党の率いる解放軍の双方の力量の綱引きによる戦闘が頻発し、その真っ直中に陥れられることになる。長春市は混乱に直面し、民衆の暮らしは依然として辛苦の毎日が続く。木山捷平は帰国できずに難民収容所にとどまった日本の作家であって、当時の長春を目の当たりに見、帰国後、記憶をもとに整理し、一編の長編小説——「長春五馬路」を公にした。

1、作者その人その事績

木山捷平は、1904年に岡山県に生まれ、1968年に亡くなった。1944年12月、満洲農地開発公社の職員となり、妻子を国にのこし、単身で長春に来た。当時すでに40歳になっていた彼は、日本ではすでに少しく名の知られた作家、詩人であって、短編小説「河骨」および長編小説「和気清麻呂」、さらには多くの詩歌を発表していた。1945年8月、第二次世界大戦がまさに終結しようとしていた時、彼は軍隊に招集され、四十過ぎの一老兵となるが、入隊手続きが済んだと同時に、日本は降伏し、第二次大戦は終結する。彼は公職も軍籍も無い日本の一難民となってしまう。日本人の多くが国へ引き上げてしまったので彼の面倒を見てくれる人はいなくなり、彼自身はどのようにしたら好いかが分からないまま難民収容所に入る。「長春五馬路」は主人公が難民収容所に入った所から書き起こされている。

2、作者の筆になる長春

小説は、作者自身をモデルにして造形された主人公木川正介が何とか生きてゆこうとする営みを描く。はじめは酒蔵で醸造された白酒を仕入れて来ては難民収容所の日本人と朝鮮人に売っているが、やがて職を転じ、襦袢を売る商売（ボロ屋）を始める。すなわち残留している日本人の手から古着や不要な生活用品を集め、路地に風呂敷を敷いて露店を出し、中国人民や農民に転売するのである。

木川ははじめ、金という朝鮮人の下働きとなり、金が集めてきた古着や古物を市に持って行っては売り、その売り上げの中から分け前を貰っていた。しかし金の好意がうわべだけで実は自分には儲けさせてくれないことが分かったと、木川は金と手を切り、我が道を行くことにし、ひとり立ちする。はじめは街頭で売っていたが、やがて五馬路に一大古物市場があり、多くの人がそこで露店をひろげ古物を売っていることが分かったと、すぐさまそこに我が身を投ずる。当初は要領がつかめず、一銭も儲けからなかったが、周囲の中国人同業者に教えてもらって、しだいに要領がつかめるようになる。彼が

日本人だと分かったら、同業者たちは進んで土地の一角を分け与え、彼に露店を出させてやるのである。

小説の背景になっているのはそのような激動の不安定な時代ではあるけれども、逆に何の起伏の激しさも（小説には）無い。ただただ一つ一つの生活を取りまく瑣事が平易素朴に話の筋を展開させている。ただし、魚を捕った事と、別の日本人が針金を盗んだために解放軍に捕まった事件だけは、幾分か肝を冷やされる趣きがある。解放軍ははじめ彼らを悪人と見て銃を突きつけるが、二人の身分を調べてはつきりすると、寛大になり、さらに木川には日本人の所からゲートルをあまた集めさせ、公的に料金を払い購入してやろうとする。

作中には商人の寡婦呉永春が木川を誘惑する場面があり、木川もまた密かに五馬路の「南姑娘」に恋している設定になっている。これらには虚構の要素が少なくはないが、あのように戦乱で荒廃した時代ではあっても、あり得ることである。作中には東北（満洲）農村の滑稽な民謡も挿入されている。今ではもう知る人は少なくなっているが、当時のその土地固有の人々の風習を反映しており、読んだ人は笑いを抑えられない。例えば、木川が寡婦呉永春の家で酒を飲んだとき、その家の年少の女中（小婢）が興にのって歌っている。

張ねえさん、李ねえさん
南の畑へ豆摘みに
一籠も豆を摘まぬうち
臨月のおなかが痛み出し
裾をまくってお家にかえり
急いで寝床に藁を敷き
おならを一つぷとした

作者木山捷平はソ連の赤軍、中国の人民解放軍（作中では「中共軍」）および国民党の軍隊が長春で互いに進攻し合う場面を自らの目で見ています。ソ連軍の「軍票」、日本人の紙幣、国民党の「票子」、解放軍の貨幣が同時にあるいは交互に流通するという混乱した時期を自ら体験している。また、中国の一般人民の度量の大きさと、解放軍が日本の侵略者と日本の一般市民とを厳格に区別する具体的な行動と事例とを直接体感しているのです。

3、作者および作品に対する評価

作品は解放軍の規律の厳格さ、一般人民に迷惑をかけない様子を繰り返し提示している。その点からは、やはりこの作品は中国に対して比較的友好的であり、観点も公正であると言うことが出来る。彼は右翼作家のように帝国主義の侵略を美化したり、中国人の零落を譏ったりはしない。当然のことながら、当時の中国の多くの混乱と貧困とを覆い隠したりもしない。作品は解放軍が長春に進駐したばかりの時を、「中共兵は規律がきびしく、一般庶民の民家に立ち入って婦女を蹂躪するようなことはなかった。この意味において街は明るくなっていたので、少女も街頭に進出したものらしかった。」と描いている（原作の第六節「七家子」に見える）。この類の描写は作品中に何度も現れる。これは人民解放軍に対する一外国人の公平な評価であると言わなければならない。

作品中で言及されている地名は仮構のものではない。描写されている地理的背景は、今日の長春とだいたい符合する。作品は長春五馬路を中心とし、前後して四馬路、三馬路、二馬路を描き、さらに大同大街、東四道街に及ぶ。周辺の農村では七家子、寛城子、長春東站、長春南 station などにも言及している。しかし、長春の呼び名は、当時の日本人が習慣的に用いていた「新京」という名を用いず、一律長春という呼び名を採用している。これは作者がまじめな思考をし、中国の読者が読んだ場合の心理と感情とに十分配慮し、意を尽くしたものであると認めて好い。遺憾なのは、今に至るまでのこの作品の中国語の翻訳が無いのと、中国人読者との出会いが無いことである。

この作品の前に、木山捷平は「大陸の細道」という長編小説を一つ発表している。作者の長春に於

ける生活を中心とした作品で、あわせて開拓団が中国の東北部に來、撤退するに至るまでの過程を描いている。木山の代表作と認められ、日本の芸術選奨文部大臣賞を受賞している。ただ「長春五馬路」の描くのは僅か1945年という小国日本の投降後一年以内の長春でしかないというのが、二つの作品のちがいである。この作品（「大陸の細道」）の構造は、いささか散漫である嫌いがあり、木村のほか殆ど誰も作品全体を通じて登場する人物はいないが、却って真実で素朴な描写がなされ、時間的経過や地理的設定、また多くの事件と史実は実際と符合している。

作者木山捷平は、すでにこの世を去っている。彼の中国に於ける経歴は白駒隙を過ぎ、瞬間に逝くがごときのものであったが、逆に「長春五馬路」は、かつて偽都であったこのうら若い都市が屈辱から解放され、しかしまだ生活機能を回復していない前の朝な夕なの、ごく僅かな一つ一つを記録している。この度の中日国交正常化30周年に際し、中国人として、長春市民として、我々は当時の歴史に責任があるばかりでなく、日本の作家木山捷平と彼の記録した「長春五馬路」を知っておかなければならないのである。

訳者贅言

地元笠岡市や吉備路文学館による木山捷平顕彰の運動は歴史を重ね、また、各種文学全集あるいは旺文社文庫・講談社文芸文庫にその作品が収録されるなど、木山捷平は一部愛好家の枠を越えた作家ではある。しかし、いまだ木山捷平の名が世に広く知られているという状況にはなく、研究者の層も厚いとはいえない。その木山について中国人研究者が関心を寄せたことは見逃しがたい。特に本稿は、木山の外地（満洲）体験に取材した作品について、中国の人々がどのように捉えているのかということを端的に語っている点において貴重であるだろう。ここに訳稿を掲載するゆえんである。

本稿の著者・黎愛寧女史（1953年～2002年）は、長春大学に勤務されていた縁もあって「長春五馬路」に興味を持たれたものと想像される。しかし、残念なことに女史は本稿発表の2002年に亡くなっている。女史による木山捷平研究が期待されただけに、その死は誠に惜しまれてならない。

この度は、故・黎愛寧女史の夫であり、長春大学外国語学院の邱劍英氏に訳稿掲載の御許可を頂戴するとともに特段の御高配に与った。記して感謝申し上げます。